

日本國天皇家論

2章 法隆寺

法隆寺は日本國天皇家の菩提寺

法隆寺は日本國天皇家の菩提寺

「法隆寺」の解明は私たちに古代奈良に関する認識を根本的に改めることを迫る

- (1) 七世紀、関西には「日本」という国号で呼ばれた古代国家が存在した。最も有名な王が「上宮法皇」である。法隆寺・釈迦三尊光背銘、法興寺遺跡は「上宮法皇」の存在を物語る。
六世紀末、日本國天皇家では仏教導入を巡り内戦が起った。その戦いに勝利して國權の中心に座ったのが若き「上宮法皇」であった。彼はその治世の元号を「法興（仏法を興す）」と定め、最初に行った国家的大事業が「法興寺」の営造であった。「法興寺」は仏教國日本の象徴、国家の理念的存在として飛鳥に輝いていた。世に「聖徳太子」として伝えられる人物はこの天皇である。
「法興寺」は日本國のみならず、百濟・高句麗・新羅にも存在しない大寺院であった。創建当時の「法興寺」は「五重塔」を中心に、「北金堂」・「西金堂」・「東金堂」の三金堂が囲む高句麗様式の寺院だった。「法興寺」は日本國の仏教の聖地であった。
「上宮法皇」は国内の行政制度として冠位十二階を定め、外交面においては、隋、唐に國使を派遣し、百濟、高句麗、新羅と国交を結んだ。現在の日本は彼の治世に創出された制度・文化・社会意識・宗教など、国家の上部構造を色濃く引き継いでいる。「上宮法皇」は、いわば、日本建国の父ともいえるべき存在であった。
日本書紀は、この「上宮法皇」を「推古朝・皇太子」として描いた。その理由は日本書紀は近畿天皇家の下に「九州天皇家」と「日本國天皇家」を一元化して編纂されたからである。事實は、「上宮法皇」は日本國天皇家の天皇であった。神武、仲哀、神功、景行、倭建、仁徳などの「九州天皇家」の天皇の系譜ではない。古代関西に存在した日本國の天皇であった。
- (2) 法隆寺・薬師如来像・光背銘によると、「法隆寺」は「東宮聖王」が祖父の為に斑鳩に建てた私的な寺であると説明されている。近江京遷都後の火災で、その「法隆寺」は燃失した。

天智9年(670)夏4月30日、夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も餘ること無し。

その寺跡が「若草伽藍」である。「若草伽藍」は発掘調査の結果、「中門」「塔」「金堂」が南北に並ぶ「四天王寺」式の伽藍配置であったことがわかった。

元明天皇が710年、平城遷都した後、焼失した「法隆寺」が再興された。奈良文化財研究所が「法隆寺の五重塔の中心柱は594年に伐採された」と、研究結果を発表するまで、「法隆寺」は焼失後、新築されたと考えられてきた。しかし、真実は新築ではなく、既存の寺を解体・移築したものであった。移築された塔の中心柱は594年に伐採されていた。故、その寺は600年代始めには完成していた寺である。600年初頭、既に「金堂」「五重塔」は存在していたということになる。そして、約100年後に移築された。

では、何処にあった寺が移築されたのか。これが現在の「法隆寺」研究の中心課題である。九州であれ、関西であれ、必ず、この寺と同じ寺跡が存在する。しかも、あちこちにあるというような寺ではない。当時、

日本、最大の寺である。その寺跡があるとしても、九州に一つ、関西に一つというぐらいなものである。現在でも、この規模の「五重塔」「金堂」「回廊」を持つ寺は数えるほどである。

「法隆寺」とよく似た寺跡は存在するか。しかも、自然に廃寺になったとか、燃えたという寺の跡ではない。或る日、忽然と「金堂」「塔」「中門」「回廊」が移築されて、消えて無くなった大寺である。恐らく、礎石のみが残っているはずである。このような寺跡が存在するか。

「法興寺」である。「法興寺」は昭和31年、32年に発掘調査されるまで、その規模は誰にも知られず土中に埋もれていた。発掘調査して初めて、「法興寺」は「一塔・三金堂」の高句麗様式の堂々たる大寺だったことが判明した。この寺こそが、解体・移築され、「法隆寺」として再興された寺であった。

- (3) では、何故、焼失した「法隆寺」の再興の為に、「法興寺」が移築されたのか。生きている寺を解体、移築した理由は何だったのか。誰がそのような暴挙を行ったのか。この問いが「法隆寺」の謎に迫る本質的な問いである。

710年、元明天皇は平城京に遷都した。新しい支配者は、日本國天皇、「上宮法皇」が法興2年(592)に营造開始して、法興9年(600)に完成させた日本國最初の国立寺院、「法興寺」の存在を許さなかった。日本國の新しい支配者として君臨した元明新政権の宗教シンボルは「九州天皇家」の神「天照大神」を祀る「伊勢神宮」であった。元明政権は政治的な観点からも、宗教的な観点からも、「上宮法皇」の「法興寺」の存続を許さなかった。

「法興寺」は破棄される運命にあった。だが、旧日本國天皇家の人々は、元明政権に嘆願した。「焼失した法隆寺を再興をしたい。その為に、法興寺を移築したい。是非に」と。願いは聞き届けられ、「法興寺」の「中金堂」「五重塔」「中門」「回廊」は解体され、移築され、「法隆寺」として再興された。

- (4) 再興された「法隆寺」には本尊・丈六釈迦像は移されなかった。「上宮法皇」の生き写しである「釈迦三尊佛」のみが移された。「法興寺」の本尊は残された。この本尊のために新しい寺が建造された。それが「元興寺」である。「元興寺」は「法興寺」と同じ寺と伝えられているのはこれが理由である。「法興寺」と「元興寺」の本尊は同じ「丈六釈迦佛像」である。「大法興寺」は二つの寺に分割された。一つは「法隆寺」として、もう一つは「元興寺」として存続することになった。

「法興寺」は日本國天皇、上宮法皇が「法興元年(591)」から建造した国立の寺であった。蘇我氏の氏寺という日本書紀の記述は作為である。日本書紀に「法隆寺の焼失記事」はあるが、「法興寺」の喪失記事はどこにもない。「大法興寺」が、突然、姿を消した理由を日本書紀は記すことができなかったのである。

- (5) 元の「法隆寺」の由来は、「法隆寺」の「薬師如来像」の光背銘に書かれている。

それによりますと、用明天皇が自らのご病気の平癒を祈って寺と仏像を造る事を誓願されましたが、その実現をみないままに崩御されたといひます。そこで推古天皇と聖徳太子が用明天皇のご遺志を継いで、推古15年(607)に寺とその本尊「薬師如来」を造られたのがこの法隆寺(斑鳩寺とも呼ばれています)であると伝えています。(「法隆寺畧縁起」聖徳宗総本山 法隆寺)

何と真実とかけ離れた由来文であろうか。しかし、この作られた由来を真実ではないと見るのも、また、何も見ていないと云うべきであろう。

「法隆寺」の真実は金堂の本尊配置にある。「法隆寺」の本尊は云うまでもなく「釈迦三尊佛」である。故、金堂の中心に位置する。現在の「法隆寺」は「釈迦三尊」を本尊としている。この事実が「法隆寺」の本質を表している。この「釈迦三尊」は、本当は、釈迦ではない。釈迦の姿をしているが、「上宮法皇」である。「釈迦三尊佛」とは、実は、「上宮聖王」「王后」「王母」である。

「上宮法皇」は「法興寺」を建立した日本國の偉大な天皇であった。再興された「法隆寺」は「釈迦三尊(日本國天皇)」を本尊として祀った。表向きは、「用明天皇のための薬師佛」、真実は、「上宮法皇」と「母」「妻」の三人を本尊としてきたのである。旧日本國天皇家の人々は皆、「釈迦三尊」に礼拝する時、実は、「上宮法皇」に礼拝していたのである。

「法隆寺」は「壬申の乱」によって滅びた「日本國天皇家」の菩提寺として、「日本國天皇家」の人々の手に

よって再興された。移築には多額の費用がかかったと思われる。その費用もまた日本國天皇家の人々が寄進したのであろう。

「法興寺」は元明政権が絶対許すことができない存在であった。破棄される運命を救ったのは旧日本國天皇家の人々だった。一部が斑鳩に移築され、「法隆寺」として再興された。彼らは「上宮法皇」の生き写しである「釈迦三尊佛」を新しい「法隆寺」の本尊として祀り、日本國天皇を偲んだ。「法隆寺」が護ってきたのは日本國天皇家である。

元明朝から疎外された「法隆寺」が奈良仏教界の中心に位置することはなかったが、「法隆寺」の関係者の尽力のお陰で、600年に完成した世界最古の木造建築は現在まで存続してきた。私たちは偉大な日本國天皇「上宮法皇」が建造した大寺院、「法興寺」の中金堂・五重塔・回廊・中門を、今も、見ることができる。もし、「法興寺」がそのままの姿で飛鳥に存続していたとすればどうだったであろうか。飛鳥は日本仏教の聖地として多くの民衆の魂を救済してきたであろう。また、「百済」・「高句麗」・「日本」三國の友好の標として諸外国から多くの人々が訪れ、アジアにおける仏教の中心地の役割を担ったことであろう。

「法興寺」の礎石のみがこの真実を知る。



かつて飛鳥に輝いていた法興寺の金堂・五重塔・中門

(附1) 法隆寺(法興寺)の物差し

法隆寺(法興寺)はいかなる物差しで建築されたのか。その物差しとして考えられているのは「唐尺」「高麗尺」「南朝尺」「古韓尺」である。さて、どの尺を用いて法隆寺(法興寺)を建てたのか。まず、その単位を調べよう。

「唐尺 = 295mm」 「高麗尺 = 355mm」 「南朝尺 = 245mm」

川端俊一郎氏

氏は、著書「法隆寺のものさし」(ミネルバ書房)で「南朝尺」説を提起している。

- (1) 「法隆寺・五重塔」の伐採年が西暦594年である。
- (2) 従って、使用された尺は随のものではない。
- (3) 南朝の宗に倭王は臣従してきた。倭国の首都は太宰府にあった。太宰府では「南朝尺」が使われていたにちがいない。尺の読みも「南朝・呉音」である。
- (4) 南朝の標準尺は245mmである。
- (5) 「法隆寺」に使用された尺は南朝尺である。
- (6) 「法隆寺」は「倭王」の都のある筑紫で営造された。特定はできないが、おそらくは隋書がいう倭王の都、「邪馬堆(筑後)」にあった。

関野貞(せきのただす)氏

関野氏は、1895年東京帝国大学造家学科を卒業し、1896年内務省技師、奈良県技師となり、奈良の古建築を調査し、建築年代を判定した。また1889年に平城京址を発見した。(以上Wikipedia) 関野氏は「法隆寺金堂塔婆及び中門非再建論(明治38)」において、法隆寺は「唐尺」では寸法が合わない。唐尺より古い「高麗尺」が使われていると発表した。「高麗尺」は、正倉院にある唐尺平均値の1.2倍、約355mmと云われる。

「法興寺」で使用された尺度は「高麗尺」

果たして、どの尺が用いられたか。法隆寺の「塔」「金堂」は「法興寺」の「塔」「北金堂」が移築されたものである。元の「法興寺」の寸法で測ってみよう。「法興寺」の発掘調査記録がある。

塔は7m四方

北金堂は正面21.2m、奥行き17.5m

中門は正面16.7m、奥行き13.3m

西金堂は正面19.3m、奥行き14.8m

南門は正面10.5m、奥行き8.4m

(「飛鳥寺」坪井清足・中央公論美術出版)

	北金堂		西金堂		塔	中 門		南 門	
	正面 21.2m	奥行き 17.5m	正面 19.3m	奥行き 14.8m	7m	正面 16.7m	奥行き 13.3m	正面 10.5 m	奥行き 8.4 m
南朝尺 245mm	87倍	71倍	79倍	60倍	29倍	68倍	54倍	43倍	34倍
高麗尺 355mm	60倍	49倍	54倍	42倍	20倍	47倍	37倍	30倍	24倍
唐尺 294mm	72倍	60倍	66倍	50倍	24倍	57倍	45倍	36倍	29倍
古韓尺 268mm	79倍	65倍	72倍	55倍	26倍	62倍	50倍	39倍	31倍

- (1) 単純な割り算で、北金堂を例にとると、 $21200 \div 245 = 86.5$ 、四捨五入して、「87」とした。
法隆寺五重塔中心柱伐採は594年である。ここが建造の始まりである。故に「唐尺」はあり得ない。

- (2) 川端氏は、「法隆寺」は九州筑後で建造されて、斑鳩に移築されたと述べている。確かに九州王朝は南朝・宗と深い繋がりがあった。もし、「法隆寺」が九州王朝で建造されたのであれば、南朝尺が使われた可能性がある。川端氏は「上宮法皇」を九州王朝の「倭王」と把握している。故に、筑後で作られたと考えている。しかし、「上宮法皇」は、元号「法興」を定めた日本國天皇家の天皇である。当時、北九州に存在した「九州天皇家」は元号を定めることはできなかった。元号を定めたのは列島の支配国家、日本國天皇家である。「法隆寺 釈迦三尊光背銘」に「法興」という元号が記されているのは日本國天皇上宮法皇の治世だったからである。移築された「法隆寺」は九州王朝で作られた寺ではない。「釈迦三尊光背」の「上宮法皇」の國、日本國天皇家建造の寺である。

なお、「法興寺」の本尊は明日香「安居院」の釈迦如来である。この佛は「上宮法皇」をモデルとしている。この黄金の釈迦佛は現在無残な姿となって、往時の姿は見ることができないが、この釈迦佛と全く同じ姿をしている佛がある。大きさは比較にならないが、「法隆寺」の「薬師如来(実は釈迦佛)」である。「安居院」の釈迦如来像、「法隆寺」の釈迦三尊像、「法隆寺」の薬師如来像は、使司馬、鞍首止利佛師の作で、全て、上宮法皇をモデルとした佛である。

- (3) 「法興寺」で、「南朝尺の10の倍数」となるのは、「西金堂」の奥行きのみである。建物で最も重要な面はむしろ、正面である。正面に、「一単位×10の倍数」の長さが使われていると見るのが自然である。この観点でいえば、「法興寺」には「南朝尺」は使用されていない。川端氏の指摘の如く九州王朝の単位として「南朝尺」が使用されていた可能性は高い。九州王朝とは古代中国呉の王家一族である。国家の度量に祖国「呉」の度量を使用したと考えられる。

同じ視点で見ると、「法興寺」は日本國天皇家建造の寺である。「法興寺」の尺度が分かれば、当時の日本國天皇家の尺度が判明する。日本國天皇家ではどのような度量が使用されていたのか。この問いへの回答が「法興寺」の物差しである。「度量」は国家である。一つの国家は一つの度量を持つ。九州王朝が「南朝尺」ならば、日本國天皇家の尺は何か。「法興寺」建築に使用された物差しが日本國天皇家の物差しである。

- (4) 上の表からみると、「法興寺」の寸法が「10の倍数」となっているのが最も多いのは「高麗尺」である。
「高麗尺・355mm」を(k)と置き換える。

$$\text{北金堂正面} = 60k \quad \text{塔} = 20k \quad \text{南門正面} = 30k$$

日本國では「高麗尺」が使用されていた。「法興寺」は高句麗様式の伽藍配置であった。当然、高句麗の最高の建築士が高句麗の尺度を使い、高句麗様式の寺を建てたのである。日本國の建築は「高句麗」の技術者が先導し、「高句麗」の度量を使って建造していた。

日本國では公式の度量として「高麗尺」が用いられていた。「唐尺」に変わったのは大宝律令以降である。尺度は「国家」である。「高麗尺」から「唐尺」への交替はその背景に国家の交替があったからである

なお、「古韓尺」とは新井宏氏が提起した古代尺である。しかし、この尺度を定めたのはいずれの国家か明確ではない。国家と「度量」は不可分である。国家の見えない「古韓尺」は仮定にすぎない。コンピューターの計算結果として妥当な数値として想定できても、実在しなかった尺度である。現在の「法隆寺」は新築再建された寺ではない。飛鳥に存在した「法興寺」を移築したものである。その「法興寺」の物差しは「高麗尺」が使用されていた。

結論は、関野貞氏の「高麗尺」が正しい。



高麗尺で建てられた法隆寺金堂（法興寺中金堂）

（附2）聖武・大仏造像は「法興寺」がモデル

東大寺大仏は、聖武天皇により天平15年(743年)に造像が発願された。実際の造像は天平17年(745年)から準備が開始され、天平勝宝4年(752年)に開眼供養会が実施された。中国河南省の奉洗寺の大仏がモデルといわれる。のべ260万人が工事に関わったとされ、関西大学の宮本勝浩教授らが平安時代の『東大寺要録』を元に行った試算によると、創建当時の大仏と大仏殿の建造費は現在の価格にすると約4657億円と算出された。

大仏は当初、奈良ではなく、紫香楽宮の近くの甲賀寺(今の滋賀県甲賀市)に造られる計画であった。しかし、紫香楽宮の周辺で山火事が相次ぐなど不穏な出来事があったために造立計画は中止され、都が平城京へ戻るとともに、現在、東大寺大仏殿がある位置での造立が開始された。制作に携わった技術者のうち、大仏師として国中連公麻呂(くになかのむらじきみまろ、国公麻呂とも)、鋳師として高市大国(たけちのおおくに)、高市真麻呂(たけちのままろ)らの名が伝わっている。天平勝宝4年の開眼供養会には、聖武太上天皇(すでに譲位していた)、光明皇太后、孝謙天皇をはじめとする要人が列席し、参列者は1万数千人に及んだという。開眼導師はインド出身の僧・菩提僊那(ぼだいせんな)が担当した。

(ja.wikipedia.org/wiki/東大寺盧舎那仏像)



聖武天皇は天平15年、次の詔をだした。

誠に三寶之威靈に頼りて乾坤相泰らに、萬代の福業を修めて、動植咸く栄えんことを欲す。ここに天平15年歳次癸未十月十五日を以て、菩薩の大願を發こして、廬舎那佛金銅の像一軀を造り奉る。

では、聖武天皇はどこから大仏を造る着想を得たのであろうか。東大寺大仏は中国河南省の奉洗寺の大仏がモデルといわれる。

奉洗寺の大仏は唐の時代の672年に三代皇帝高宗李治が建立を始め皇后武則天が化粧品代の2万貫の金を寄進して675年に完成した。廬舎那仏の高さは 17.14m、顔の長さは4m。主尊の右の迦叶は落ち着き、左側の阿難はおとなしく従順な姿。両脇の菩薩は色鮮やかな盛装を身に着け、天王は壮大・雄壮、力士は勇猛である。これこそが中国・唐時代仏教彫刻の芸術的傑作であると解説されているという。

聖武天皇が着想を得たのは70年ほど前に作られた唐の三代皇帝高宗李治と皇后武則天が作った奉洗寺大仏かもしれない。だが、仏を作り、寺を建てその仏の福力によって人民を救済するという政治理念は日本國天皇家「上宮法皇」から得たのではないか。聖武天皇は、恐らく、「上宮法皇」の存在とその治世を知っていた。日本國天皇家の都、飛鳥に丈六金銅釈迦像を敬造し、「大法興寺」を建立したことも知っていた。その事実だけではなく、その背後にあった仏教思想もまた知っていたと思われる。

聖武天皇は日本國天皇「上宮法皇」から学んだ。「上宮法皇」は国家運営の基本を仏教に求め、その具現として「法興寺」を建立した。その本尊が、当時としては巨大な「丈六釈迦金銅像」だった。

聖武天皇のお手本はかつての日本國天皇家に存在した。理想としたのは「上宮法皇」であった。



(<http://www.ja6ybr.org/~jf6dea/hsrpt/by/byrpt413.htm>)